新　刊

□清水建美（著）•梅林正芳（図）：**日本草本植物根系図説** 262 pp. 1995. 平凡社. ￥15,000.

植物の地下部を描いたまとまった図鑑としては，樹木根系図説（刈住）がわが国唯一のもので，外国にも例は少ないという．日本植物生態図鑑（沼田・浅野）では，地下部も図鑑の対象にとり込む試みがなされている．分類学は植物のあらゆる形質を対象としてタクソンを論ずるはずであるが，花や葉に注意が集中し，地下部はおろそかにされがちである．そのわけは，直接に目をひかないこと，採集が困難なこと，構成が複雑でつかみどころがないこと，研究の困難さに対して成果のあがりにくさが予測されて敬遠されることなどだろう．頁を開けば，あきれるばかりの描画の几帳面さに，ため息がでる．もっとも，ハンゴンソウのように，もう少し間引いて描く方がわかり易いだろうにと思うものもある．これらの図は表記の梅林氏の他に，川窪伸光氏の作品が多数含まれているとのことである．それより前に，描画の元となった資料の掘り出しに，どんなに多くの労力が費やされたかは，想像の外である．採集のとき「根も大切だから…」とひっこ抜くのとは異なり，細根の端まですべてを掘り出さねばならないからである．地面を掘る前に，根がどこまで拡がっているかを予測するには，かなりの修練を要するだろう．こういう作業を学生に課した清水氏の執念と，それに応えた学生諸氏の熱意に，敬意を表する．本書には213種類の草本植物の根系がほぼ実大で図示され，それぞれに解説が付され，各部分の名称が和•英文で示されている．試料の採集地，採集年月日も付記されている．英文名称についてはKew植物園の分類学者らに意見を求めたが，人により一致しない場合もあったという．冒頭20頁にわたって，根系の形態論と分類群による特徴，さらに同定学や系統学への適用の可能性が述べられている．地下部にも種特異性があるというのが，著者の見解である．その一例として，スズムシバナと近年識別されるようになったユキミバナがある．巻末には根系による種の検索表，用語解説，索引がある．最も目立たぬ分野で新しい地平を開拓した著者らと，それを支援した多くの人たちに声援を送りたい．　　（金井弘夫）

□万谷幸男（編）：**植物学名大辞典** B5版．420 pp. 1995. 植物学名大辞典刊行会．　￥12,000（送料￥450）．

編者は趣味の多肉植物愛好家で，学名の意味に興味をもち，植物全般の小名の意味を多くの文献から書きとめた資料を遺して，1984年亡くなられた．本書は知人有志がその努力が無になるのを惜しんで，遺品を整理し，出資刊行したものである．小名をabc順に並べ，その意味を解説してある．解説は原典からの引用で，とくに新しい解釈などは含まれていないようだが，採録件数はざっと数えて23,000語である．この数は牧野・清水の植物学名辞典が約11,000語であることを思えば，故人の努力のほどが察せられる．学名を調べたり発表したりするときの参考となるだろう．頒布については下記に連絡すれば，代金後納で発送するとのことである．〒661 尼崎市[redacted]　　（金井弘夫）

□荻原博光，山本幸憲（解説），伊沢正名（写真）：**日本変形菌類図鑑** B 5 版 164 pp. 1995. 平凡社．￥3,800（税込み）．

“生物多様性”，すなわちこの地球上における生物学的変異の広がりの問題は，1990年代の科学と政治の政策テーマとして世界的に注目されている．多様性，特にライフスタイルの多様度の点では，変形菌類（粘菌類）はその代表選手であり，形態形成，生理学，細胞学などの生物学的研究の標的になっている所以である．形態形成，生理学，細胞学などの生物学的研究の標的になっている所以である．本書の帯のキャッチフレーズ「あるときはアメーバ，あるときはキノコ」は，この奇妙な生物の多様性の一端を的確に示している．従来変形菌類は，分類体系上菌類界の仲間として位置づけるのが一般的であったが，最近の18S rDNAに基づく系統解析は，この仲間が菌類ではなしに，原生生物界もしくは原生動物界に帰属する疑似菌

類（pseudofungi）であること強く示唆している．しかし，他の生物群との系統進化的関係は，なぞの部分が多い．

本書は，3つの部分より構成されている．第1部は，総論に当たるもので，「変形菌とは」というタイトルのもとで，ライフサイクルと生態を中心に変形菌類の生物学的特性について解説している．第2部（図と解説）は，本書の中心部分で，日本に生息する変形菌類の普通種，134種8変種の形態的特徴，類似種との区別点，検索表などを記載している．ここでの図は，すべてカラー写真である．第3部は，用語解説，方法・技術，参考文献，変形菌綱 Myxomycetes の分類表，用語対照表，学名，和名索引に当てられ，本書が専門図鑑としてのみならず初心者のマニュアルないしはハンドブックとしても機能するよう配慮されている．

本書に一つ注文をつけるとすれば，学名の和名の点である．種を含むほとんど全ての分類群に和名がついている．例えば，Stemonitidaceae はムラサキホコリ科，*Fuligo candida* はシロススホコリ．接尾語の“カビ”が“真の”菌類（カビ）と区別するために意図的に省いてある．和名には，従来通り接尾語として“カビ”を付けた方が日本語として落ち着きがある．

服部広太郎著「那須産変形菌類図説」(1935年)，江本義数著「大日本植物誌　No. 8　変形菌類」（1942年）などのモノグラフはすでに絶版になっている今日，本書は，変形菌類（粘菌類）に関心をもつ人々にとって待望の1冊であり，日本語による日本産変形菌類の手ごろな専門図鑑として，ハンドブックとして重宝がられるに違いない．「図と解説」の図（カラー写真）は，この“ルーペの世界”の生物の姿（外部形態）をみごとに映し出し，本書を魅惑的なものにしている．これらの写真を眺めているだけでも，実に楽しい．

（杉山純多）

□館林市教育委員会: **館林市の植物** 195 pp. 1995. 同委員会．￥1,600（送料別）．

群馬県館林出身の松澤篤郎，島野好次，青木雅夫の三氏による，永年の調査研究の集大成である．関東平野の中央部，利根川と渡良瀬川にはさまれて池や水湿地の多いこの地域は，絶滅したがムジナモの産地として知られている．教育委員会の文化財調査の一環として刊行された本書は，したがって環境保全や教材として配置された見出しが多い．水辺・低湿地，耕作地，住宅地，林と分けて，それぞれの植物の特色が述べられている．また有用植物，名勝・天然記念物，巨樹・名木，植物観察コースの見出しで，観察に有用な情報が提供されている．類似植物の見分け方も，野外で役立つだろう．植物目録には38頁にわたって1121種類が記録されているが，内180種類が帰化植物，絶滅種・絶滅危惧種は139種類におよぶという．これらは特筆される植物という見出しで詳細に記述されている．ただ植物目録でもそうだが，採集・観察された日時が例外的にしか記録されていないのはもったいない．植物の変遷をたどるには，時刻の記録が必要だからである．植物目録は他の頁より文字が小さくなっているが，目録は最も基本的なデータなので，文字は小さくてもよいから項目は贅沢にとって欲しかった．予算の関係もあるだろうが，教育委員会としての姿勢の問題であろう．もう一つは参考文献の項に，研究小史に出てくる先覚者の業績が示されていないことが気になった．こういう古い文献はその表題の意図とは別に，なんでもない植物の変遷が無意識に記録されている可能性があるという点でも，人目につくようにしておいて欲しい．今後の参考までに記す．申込み先は〒374 館林市城町 3-1　館林市文化会館内，館林市教育委員会文化振興課．

（金井弘夫）

□近田文弘・清水建美：**中国天山の植物**　228 pp. 1996.　トンボ出版．￥25,000（送料は当分の間サービス）．

中国の奥地も，いまや秘境ではなくなりつつある．新しい地域の調査が始まるとき，まずその地を踏んだ人の見聞をみんなが知りたがる．植物に興味がある人間なら，植物や景観の写真が，たくさんの情報を与えてくれる．かつてヒマラヤの植物調査が始まった頃，「シッキムヒマラヤの植物」や「東部ヒマラヤの植物写真集」が，多くの人の関心をそそったということを，近頃になって思い